日本に紹介された『随園女弟子詩選選』について

萧, 燕婉
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9617

出版情報：中国文学論集．31，pp.60-77，2002−12−25．九州大学中国文学会
バージョン：published
権利関係：
日本に紹介された「随園女弟子詩選選」について

はじめに

清の女流詩人蔡紫瓊は、花風楼吟稿・国朝闇闇詩鈔・第十冊の「書随園女弟子詩後」の中で、「競踊袁紅色」を生じていたのである。

随園女弟子詩選は、ただ中国のみならず、江戸時代の日本においても少なくとも漢詩人は受容されて愛好された。袁枚の随園女弟子詩選は、大窪詩佛の手により、随園女弟子詩選選を友人の頼山陽に贈ったが、頼山陽はこれを丁度貴重に有するよろしきもの故呈上候、天保元年八三〇五月、大坂と東都、江戸の書肆から出版されている。

また、大窪詩佛はかつて新編の随園女弟子詩選選を友人の頼山陽に贈ったが、頼山陽はこれを丁度貴重に有するよろしきもの故呈上候、天保元年八三〇五月、大坂と東都、江戸の書肆から出版されている。このエピソードによれば、随園女弟子詩選選を友人に贈った事実は江戸時代の男性詩人ばかりでなく、女流詩人もこれを愛読していたのであり、当時の文壇に与えた影響の大きさが窺える。そこで小論では、随園女弟子研究の一環として、大窪詩佛編の随園女弟子詩選選を紹介すると共に、袁枚と
大窪詩佛の二人が詩を評価する際の基準に差異があるか否かについて検討したい。更に江戸時代における院女詩選の受容の状況を通して、院女詩選の一隅をも照射することとした。

大窪詩佛は、七七七を八三七の名でと、字は天民。詩佛・柳渓・瘦梅・江山翁などと号した。常陸茨城県に生まれた。江戸で江戸詩派の領袖市河寛斎に学んだ。市河寛斎は、文化和一・八四四年に随園に赴き、随園時代の文壇に紹介している。

書籍はなかでも主要な貿易品の一つであった。先に述べた「倉山房詩集」だけではなく、院女詩選の文集が当時の日本の文壇に非常な勢いで流行していたことは、確実な事実である。

「院女弟子詩選」の版数を標本する文学書籍が当時の日本の文壇に非常を考慮に入れるとすれば、大窪詩佛が嘉慶元年に、倉山房詩集を再編集して世に出した理由としては、時代の好尚に合うべきものと考えられることだろう。

院女詩選の文集は、江戸時代における唐船持船の研究には、重要である。院女詩選の文集は、大窪詩佛の手に入れたのだそう。大庭僑の日本に紹介された院女弟子詩選。について
ことの響えになっている。

また三の三には、

倉山老叟詩壇
倉山の老叟、詩壇に据り

闇秀才華艶艶
闇秀の才華、艶艶を争う

には天寶風流陣
便は平陽娘子軍

つまり唐の高祖の三女平陽公主のことである。彼女は高祖の大廈建国の偉業を助け、赫々たる戦功をあげた女英雄として、よく知られている。　

題辞のその三には、開放的な雰囲気のなかで、文人墨客と詩の応酬を行う時気の麗女たちに対する大窪詩佛の傾倒・思慕の情が読み取れる。恐らくこうした自由な精神の女性たちとの対等の交際に憧れたからこそ、大窪詩佛は随園女子詩選を広く日本に紹介しようとしたのではなかろうか。　

一方、袁枚女子たちの詩に強い感銘を受け、大いに称賛している大窪詩佛の姿勢からは、当時の江戸文壇に女性が詩を作る風潮が既にあって危険を知っていたことが推測される。

以後の通りである。

以下に紹介された

随園女子詩選選。二巻
文政十四年刊

九州大学図書館蔵本

随園女子詩選選。三巻
汲古書院 和刻本漢詩集成 所収

について
隨園女子詩選。六卷の構成

隨園女子詩選。二卷の構成

通行本『隨園三十種』本など。『隨園女子詩選』には二十八人の女弟子の名が記されているが、作者名の右に大窪詩佛が出版した、随園女子詩選。二卷では、すでに名の名の名を取る九人を削除している。そのため、一八三〇年に大窪詩佛は、もともと巻に収録されていた蜜雲・孫雲鶴と、巻四の孫雲鶴。王玉如との順を入れ変えている。また大窪詩佛は、もこれに対して、随園女子詩選。に収録されているのは詩のみであり、しかも随雲鶴の『山行』が六言絶句である。
袁枚の女弟子たち主として詩によって有名なのであるが、そのほか詞にも堪能であり、散文の造詣も高く、多方面に才能を示した人が少なくない。清代は詞の復興期とも言われており、袁枚も優れた騒客詩人一人であった。袁枚の留め詩を原詩の作者としても有名な人物が続出している。袁枚も優れた騒客詩集の一人であった。ある意味では随園女弟子詩選では、袁枚の女弟子たちの詩を明らかにし、袁枚と同様に、席佩蘭の詩が最も優れていると評価している。袁枚と同様に、席佩蘭の詩を最大限に活用し、袁枚の女弟子詩選においては、随園詩はその中から三十首を選んでおり、大窪詩は随園女弟子詩選の中から五十首を選ぶ。選ばれたのは全体の約四十一パーセントである。一方、随園女弟子詩選では、袁枚の女弟子たちの詩の理解したはずである。
隨園女弟子詩選。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。金逸的詩是席佩蘭詩中日本人的心捉到了。席佩蘭詩中日本人的心捉到了。
<table>
<thead>
<tr>
<th>隨園女弟子詩選選</th>
<th>金逸詩所収状况表</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 擬柳柳州（雨後晚行・獨至愚溪北池）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2. 和竹士（晚遊鄭尉作）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3. 初夏</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4. 鑾衣曲</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5. 雪後竹士歸</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6. 膳口喫發</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7. 聯句</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8. 病起</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9. 綠窗</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10. 題周河花史編夢風花人</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11. 月夜</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12. 春日</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13. 盯月</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14. 傳秋節</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15. 月夜</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16. 題候雲山館圖</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>21. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>22. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>23. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>24. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>25. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>26. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>27. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>28. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>29. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>30. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>31. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>32. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>33. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>34. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>35. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>36. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>37. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>38. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>39. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>40. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>41. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>42. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>43. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>44. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>45. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>46. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>47. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>48. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>49. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>50. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>51. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>52. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>53. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>54. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>55. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>56. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>57. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>58. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>59. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>60. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>61. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>62. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>63. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>64. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>65. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>66. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>67. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>68. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>69. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>70. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>71. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>72. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>73. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>74. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>75. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>76. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>77. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>78. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>79. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>80. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>81. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>82. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>83. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>84. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>85. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>86. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>87. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>88. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>89. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>90. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>91. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>92. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>93. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>94. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>95. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>96. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>97. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>98. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>99. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>100. 傳侯雲山館圖 &quot;雪蘇詩編集&quot;</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
此心凛無念
昨夜入城提蟹筐
東隣嫁女素玲
彩幣百千束

綺羅十二箱
龍章象服何煌煌
歸來泣對鏡中錦
平生不識鶴與桑

知與誰人作嫁裳
又聽繻緯啼金井
刀剪斷機不如寂

又聞く繻緯の金井に啼くを

詩中之印を施したのは、換題の箋所である。この詩は、心をかすして豪奢な生活を送っていた東隣女と対照するこ
とによって、織女の貧困な遺言を際立たせている。織女に対する深い同情を率直に述べ、その表現には縫り気がな

随って音の響きが流れ出ている。まさに袁枚の「字出於性靈、不拾古人牙慧、而能天機清妙」に於て

性靈より出で、古人の牙慧を拾わずして、能天機清妙にして。

通じてある。

以上の様々な詩を詠んだ席佩蘭の文学観・人間観の核心が「情の重視」にあることとは明らかであるが、同時にも彼

女が自由で奔放な文学世界を追求していたことも伺えよう。次に、夫婦が闇房でひそかに話しあう情景を詠んだ

日本に紹介された
席佩蘭の「同外作」。隴園女弟子詩選。「巻一」を見てもよい。
冬雪は雪月光の別名です。鶴は雪の詩を書かせたが、鶴は鶴頭の姿が写されていない。
一方、多情多病の才女金逸の詩の題材は、が手が病気の悩みや、愛にまつわる女性苦しみを歎びに限られて
夫との短い別離によって、金逸は孤独に悩まされ、いつにまでも長い夜を過ごすやせる相思の情を、詩の中
に切々と吐露している。その傾々として懐かしむべき哀婉にして繊細な詩情は、読者の胸にしみじみと感じられるの
である。

金逸の詩は全体的に唯美的色彩が強く、濃厚な闇情が立ちこめているという印象を受ける。
とりわけ夫に対する
生活範囲が限られたため、鶴細且巧緻を凝らした技巧によって描写される題材は、私生活や自分の悲歓
前の景色などが中心であつた。

妻の詩に対するものというよりも、むしろ妻の
詩への彼女の優れた理解力に対するものであったと考えられる。
以上、席間と金逸の詩風それぞれの特色を明らかにした。次に大窓詩仏と賴山陽、謹に女性らしい纖細な表現に優れている金逸の詩を、どう評価したかについて検討してみよう。

まず賴山陽について見てみたい。賴山陽の詩や歌は、己れの心情を自由奔放に吐露したものであり、その観察の鋭さと表現の犀利によって、一代に抜きんでいた。

流文学の理解者であった賴山陽は、女子たちを指導する際には、彼女らの作品を丁寧に添削し、評語までをも付している。そこから彼女らの習字の足跡を如実に観ることができる。たとえば江馬細香の「朧夢遺稿」を繰り返し食べ、そこに賴山陽の詩興を見ることができる。中でも特に注目に値するのは、極めて頻繁に現れる「真女郎語」。

詩絶佳、真女郎の詩なり、絶佳や、これに類似した「真間秀の語」に間秀の語なり等を詠む。彼女らの作品を丁寧に添削し、評語までを付している。

もう一人の女弟子江馬細香は、むしろより豁達でおおらかな詩風に懐かしていたようだが、賴山陽は彼女の「歳晚即」を読んで、「女子の詩自から宜しき所有。它他篇往従にして丈夫、男性の語に類す。」

読者がそのようなものであったとすれば、鋭敏な感情と柔弱な詩風を兼ねた金逸の詩を、いかに彼が高く評価し、日本に紹介された。隠居女弟子詩選。について
結局五山は女性らしい優雅な詩のみを選んでいるのである。

袁枚に憧れ、『景偽巻子』に詩聖堂詩集を刊した石山本北山の序と称された大労詩佛ではあったが、袁枚や頼山陽のようにならが弟子を持つには至らなかった。また直接女流文学に触れた論評は非常に少ないため、彼が女流文学に対してもいかなる意見を抱いていたかを知ることは困難である。しかし『五山堂詩話』巻五の、彼が女流詩人文姫に詩を贈った記事には、次のようにある。

比來閑秀鍾于北山先生一家，……女弟子文姬號小窪，聰慧能詩。摘句云：梅子欲肥先釀雨，竹孫稍長不禁風。聯句云：梅子肥成 xamarin雨，竹孫日長時風。花，改為換句。按句的水，綿服，成句云。

文姫の敬慕の情を詠ったこの詩において、「人間詠歎法の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと言われているのは、明清時代の仙女崇拝文学の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと言われているのは、明清時代の仙女崇拝文学の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと言われているのは、明清時代の仙女崇拝文学の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと言われているのは、明清時代の仙女崇拝文学の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと言われているのは、明清時代の仙女崇拝文学の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと言われているのは、明清時代の仙女崇拝文学の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと言われているのは、明清時代の仙女崇拝文学の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと言われているのは、明清時代の仙女崇拝文学の影響を受けたものであるか、あるいは彼女は天帝に仕える仙女であったと思われる。したがって、文姫の楚々たる詩情を称えた大労詩佛の詩や、彼と親交のあった頼山陽や菊池五山の女流文学観からみれば、隠園女弟子詩選を選んだ金逸の抒情詩に対する傾倒の強さが示しているような私生活の描写・述懐訴嘆に対する選詩の愛好によって、結局純朴な行旅、詠事の詩や、あるいは論調詩などは、隠園女弟子詩選。の中では淘汰されるということになったのである。
中国文学論集
第三十一号

終わりに

以上、小論では、隣園女子子詩選』が嘉慶元年に中國で刊行されて以来、日本への流通のプロセス、及び受容者側の事情を中心に検討してきた。昔から日本と中国とは、文化の上で特に密接な関係があった。明末清初の名媛詩人、日本の文壇や日本の女性文学の隆盛にともなって、日本に舶載される書籍は次第に増加していた。当時、年々書籍の流通行が頻繁に行われる中、明末以来の日本の女子文学の盛況は、中国の詩文を読む、書画を愛し、中国文化に非常に頼倒していた日本人に夢中になった。特別に男性文人なら、日本の文人が知る女性風に大きな刺激を与えたようである。例えば、名媛詩人の『名媛詩詞』のartonを手に入れ、和刻されていった。この選編の選出者として、「女弟子」という言葉は、新鮮な魅力をもって当時日本の女子文学の盛況をみると、精神の自由を重視した袁枚を意識して、「女弟子」の存在を誇示し、同時にその時代を捉えた女性観に対して果敢な挑戦を試みた。袁枚と山陽が詩人としての文人として、極めて鮮明でありまた相い合って、彼の主観を誇示し、同時代の日本と中国との間で、時的な隆盛を迎えることになった。したがって、隣園女子子詩選』は日本に紹介されることによって、日本の女子文学の隆盛を支え、強力に促進したと考えられるのである。その意味で、隣園女子子詩選』は日本の文藝を形成し、発展させることを示唆している。
詩選。は、女流文学発展史上に欠かすことのできない重要な書物として再評価される必要がある。特に、中日文化交流の観点から、女流詩が如何なる役割を果たしたのかを再評価することは重要である。本稿では、女流文学の特徴とそれが与えた影響について考察する。

注

市河寛斎による『隠園詩選』の雑出の方法及び選詩の基準については、竹村則行『袁枚と白居易が詠んだ杭州西湖』に紹介されている。
大庭脩 江戸時代における唐詩選の研究 　江戸詩画書目 三九見参照

選集詩．江戸時代における唐詩選書の研究

選集詩．江戸時代における唐詩選書の研究

選集詩．江戸時代における唐詩選書の研究

選集詩．江戸時代における唐詩選書の研究